

葛洪の文芸思想

林田, 慎之助

<https://doi.org/10.15017/2332717>

出版情報 : 文學研究. 74, pp.107-128, 1977-03-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

葛洪の文芸思想

林 田 慎 之 助

一

魏晉時代の文学の著しい特徴に、批評文学の発生がある。曹丕の『典論』論文、摯虞の『文章流別志論』、陸機の『文賦』、李充の『翰林論』はいずれも文芸批評の專著である。このような魏晉期における批評文学の出現はかつてみることのできなかつた現象であつた。一つの強力な思想の統制支配のもとでは、もとよりさまざまな思想表現の自由はない。思想表現の自由のないところに、文芸批評の発生と成熟はのぞむべくもない。後漢の末に儒教万能の時代はすでに終焉をつけていた。儒教一教支配がなくなると、人々が老莊などさまざまな思想を享受できる時代がそこにきていた。魏晉の時代に批評文学が発生し、ある程度の理論的成熟を可能にした背景には、このような時代の思想の状況があつたといえる。

しかしながら、それだけが批評文学の発生をうながした理由ではなかつた。この時期に詩文選集の本格的な編者が出現していることは見逃せない。例えば『文章流別志論』であるが、これはもともと『文章流別集』と称する詞華集の編著があつて、これにくっつけていた文体批評の文芸論であつた。詞華集の編集には作品の撰択をともない、作品の撰択には必ず編者の好みがともなう。その好みを理論的に武装し主張するとき、批評文学が発生する。

東晉の時代になって、葛洪は『抱朴子』を著し、とりわけ外篇の隨所に、自分の文芸に関する意見や好みを書きと

めているが、そのなかには、此の時代のものとして卓越した批評的見識をみせ、魏晋期の文芸思潮の動向を鋭くついた資料がある。にもかかわらず、それが批評文学の専著でないがために、これまでまともなたちでとりあげて、縦横に分析し検討した論文は殆どなかった。僅かに、郭紹虞、朱東潤、羅根沢の中国文学批評史がせいぜい一章をさいて、それに論及している程度にすぎない。そこで拙論はあらためて『抱朴子』のなかから、葛洪の文芸思想に関する資料を洗い出し、それぞれの個別の資料が、他の個別の資料との対応のなかで、いかなる有機的な関連構造をもちながら、葛洪固有の文芸思想として結晶をみせているかを、可能なかぎり検証してみることとする。併せて葛洪の文芸思想が、魏晋の思想史のなかでいかなる同時代性を刻印しているかについて、考えてみたい。

二

葛洪（二八四—三六二）は字を稚川といい、丹陽句容県の出身である。その号を抱朴子と称し、その思想の書に抱朴子の号をそのまま題名として用いたのは、葛洪の性格が流俗にとらわれて世間と共に変るのでなく、自分の常を守る信条を持ち、その発言も卒直簡潔であったがために、人々が彼を指して朴を抱くものとしたことに由因する。父君の葛梯は初め呉に仕えていたが、晋朝の三国統一後は、その朝に出仕して、大中正、肥郷県令、会稽太守を歴任している。この父は葛洪十三歳の時になくなっているが、このために、葛氏の家計は今までとうって変ってにわかに貧窮の度を加えてゆくことになる。この貧窮のなかで、少年期から青年期を過ぎねばならなかった葛洪は薪を売っては紙を求め、蔵書家がいるときけば千里の路も厭わず訪ねて書を借りて写し、柴を燃した燈火の下で読書をつづけた。かくして経書、史書、諸子百家から雑文に至るまで一万巻を読破し、その一言半句をも誦んじて忘れなかったという。『晋書』葛洪伝によれば、典籍を究覽した葛洪がもっとも好んだものは神仙養生の法であったとして、その由来について、次のように述べている。

遂に典籍を究覽して、尤も神仙導養の法を好む。從祖（葛）玄は吳の時に道を學んで仙を得て、号して葛仙公と曰う。其の煉丹の秘術を以て、弟子鄭隱に授く。洪は隱に就いて學び、悉く其の法を得たり。後に南海太守上党の鮑玄に師事す。玄亦た内學し、あらかし逆め將來を占う。洪を見て之を深重し、むすめ女を以て洪に妻す。めあわ洪は玄の業を伝え、医術に綜練す。

晋の太安年間に石冰の乱がおこると、朝廷の要請を受けた葛洪は數百人の義勇兵を募り、これを諸隊に加えて、みずから將兵都尉となつて賊の討伐に活躍する。乱平定後は、その功によつて伏波將軍の称号を授かつたものの、葛洪はあつさり軍職を退き、珍書を涉獵するために洛陽に赴いている。しかしながらひきつづいておこつた八王の乱に遭邁し、せつかくの目的を果さずに終つてゐる。時あたかも京師にあつて友人の嵇含が広西刺史を拜し、葛洪を參軍にしたいと願ひ出たので、南方避難の便宜を考へた葛洪はこれに就任し、ただちに広州に赴くことになる。その間、嵇含の暴死があつて、官職を退くが、そのまま広州に滞留した後、再び郷里に歸つてゐる。その後も頻りに州郡の長官から召聘を受けているが、それには応じていない。『抱朴子』自序篇によると、葛洪は若い頃から、太古の巢父、許由等の隱士を慕い、布衣のまま大儒で終つた後漢の法真、俠氣に富み出仕を拒みつづけた後漢の申屠蟠などの人柄と生き方に共鳴し、經書に通じて理想の書を著す文儒になりたいという志が強かつたという。それがこの時及び其の後の度重なる召聘を拒んだ理由であつたであらう。

司馬睿が三一七年に東晋朝を建業に興し、西晋の皇統を継ぐと、石冰の乱に於ける過去の功績の追賞がおこなわれて、葛洪は関中侯の爵位をあらためて授かり、併せて郷里句容東三百戸の租税を俸祿として受けることになる。此の恩賞にあづかつたためか、咸昭初年（三二六）に再び召された折には、辞退せずに州の主簿につき、諮議參軍にすんでゐる。

この頃、葛洪と親交があつた者に『搜神記』の撰者、干寶がいる。すでに著作郎の官位にあつて、『晋紀』の編纂

に従事していた干寶が「才は国史に堪う」（晋書葛洪伝）人材として、葛洪を散騎常侍、大著作の官に推挙したため、強い就任要請を受けるが、葛洪は州の主簿、參軍の地方官に就任することで一応の申し開きができたと考えたのか、今度は固辞して遂に出仕しなかった。只ここで留意しておきたいのは、干寶と葛洪との関係である。いずれ後に触れることになるが、葛洪の文芸批評と、その清談派——とりわけ「曠達派の亜流」批判は、この干寶との交友を媒介とした文学的、思想的な関連をぬきにしては考えられぬ側面をもつからである。

葛洪は此の頃までにはすでに、王充の『論衡』の編述の態度にならって、『抱朴子』の著述を完成していた。その後、老年を理由に故郷を離れ、広州の羅浮山にこもって煉丹に専心している。そうした或る日のこと、かねてから葛洪の崇拜者で広州刺史をしていた鄧嶽のもとに、葛洪からの便りが届いた。それには遠く師匠を求めて、旅立つとあったので、鄧嶽が驚いて出向くと、すでに葛洪は坐ったままの姿勢で眠むるようにならなっていた。佐中壯氏の「葛洪の生涯とその風格」の考証によると、鄧嶽が広州刺史在任中（三三〇—三六一）に葛洪の卒去があったとすれば、咸和五年（三三〇）から竹平五年（三六一）の間の某年であるとみて、葛洪が八十一歳で死んだとする『晋書』葛洪伝の説に疑いをはさんでいる。八十一歳卒去説は、「其の顔色を視るに生けるが如く、体亦た柔軟。尸を挙げて棺に入るれば、其の軽きこと空衣の如し。世以て尸解仙と為す」と述べる晋書本伝の伝説めいた葛洪の卒去情況から、若干の誇張を加えて出された年令で、鄧嶽のことから考えてとうてい無理な説であると佐中氏はみている。^①

葛洪の著書については、『晋書』葛洪伝が「碑誄詩賦百卷、移檄章表三十卷、神仙良吏隱逸集異伝各十卷、又抄五經史漢百家之言方伎雜事三百一十卷、金匱藥方一百卷、肘後要急方四卷。」と列挙し、「洪は博聞深洽、江左の絶倫、著述篇章は班馬より富み、又精弁玄頤にして折理微に入る」と絶賛している。『抱朴子』は彼が二〇歳をすぎたころから書きはじめ、戦乱の間も筆を休めずに綴り、十数年を経た建武元年（三一七）に完成したものである。葛洪は『抱朴子』を内篇外篇とわけたことについて、「其の内篇は神仙、方藥、鬼怪、變化、養生、延年、禳邪、却裕の事を

言いて道家に属す。其の外篇は人間の得失、世事の蔵否を言いて儒家に属す」（自序篇）と語っているが、拙論がここに対象とする葛洪の文芸思想についての資料は、おおむねこの外篇に属する『抱朴子』の論説及びその逸文によるものである。^②

三

葛洪の文芸思想を總体的に点検するにあたって、まずは彼が「文学」の語義をいかに把握していたか、つまり彼の「文学」についての概念規定がいかなる内容をもつものであったかを見ることにする。

聖人は之（道）を文に實^みらせ、之を学に鑄^いる。文学は人倫の首^{はじ}め、大教の本なり。（太平御覽六〇七抱朴子逸文）

ここで葛洪が先ず文と学とを分離して、それぞれ独立の概念をもつ語義として用いているところからみて、それは漢代の「文学」觀念にちかひ。漢代では「文」と「学」の概念をあきらかに区分して用いているし、この区別に対応する概念として「文章」と「文学」の用語を使っている。^③葛洪の「文学」が詞章詩賦を指していないことは、道のための文であり、道のための学であるとして、人倫道德の基本にあるものを「文学」とみていることからあきらかである。葛洪は道の発揚と一体化したものととして「文学」をとらえている。云うまでもなく、今日の所謂「文学」の概念ではない。しかしながら、『抱朴子』における「文学」という概念語の使用は極めて少ない。葛洪は文芸作品を問題とする場合には文章といい、詩賦といい、辞義といい、時には文芸と云うて所謂「文学」と区別した。それだけでなく彼は文人と儒人をはっきり区別してみている。儒人は「古典の奥義を明かにして博く古言を究めて真理を探究する」ものであり、文人は「筆鋒鋭く論を立て」^④「のびやかで筋が通っている」文章を書くものと規定しているのがそれである。

先に掲げた『抱朴子』の逸文について、清の嚴可均はもと勗学篇か尚博篇に入っていたものであろうと推測してい

るが、おそらくそうであろう。その『抱朴子』勗学篇をみると、葛洪は読書して学問を積み、人間としての資質を磨くことの必要性について、次のように力説している。

夫れ劉削（彫刻）、刻画（絵画）、薄伎、射御、騎乘の易事すら猶慣習を須^まつて、然る後善を能くす。況んや人の曠きをや。道徳の遠、陰陽の変、鬼神の情は細邈去奥にして誠に生知し難し。色白しと云うと雖も、染むるに匪^{あら}ざれば麗ならず。味の甘しと云うと雖も、和するに匪^{あま}れざれば美ならず。故に瑤華も琢せずんば則ち耀夜の景は発せず。丹青（名剣）も冶^やずんば則ち純鈞（越の名劍）の勁は就^ならず。火は則ち鑽^きらずんば生ぜず、扇がざれば燂^{さか}んならず。水は則ち決せずんば流れず、積らざれば深ならず。故に質は我に在ると雖も、成すは彼に由る。

（勗学篇）

葛洪はここで、質は個我のなかに内在するものであるが、その質に価値ある美しさと深かさを附与して完成させるものが学問であるとみている。漢代の「文学」概念が學術、学問の意味をもっていたように、葛洪の所謂「文学」は儒教の学問に個我に内在する質を普遍的に価値ある存在として磨き高める学問の謂であった。漢代の所謂「文学」は儒教の学問に限定を受け、それに短絡する方向にあったのがおおむねの傾向であったが、然しながら、葛洪の学問は儒教の經典のみを対象としていない。そこに限定してしまわないところに、学問思想を受容する葛洪の独自の潤達さと自在さがあつたし、それは儒教万能主義が崩壊した後漢末から、魏晉を経た東晋時代の思想的特質ともからんでいる。

七経を披^{ひら}いて百氏を遊び、然る後に面牆の至困を覚^{さと}る。夫れ学ばずして知を求むるは、猶魚を願いて網無く、心は勤むると雖も獲る無きがごとし。伝を広め以て理を窮むるは猶風に順い焉^{これ}に託するがごとし。体勞せずして遠きを致すなり。——無外を見んと欲すれば必ず之を載籍に由り、涖微を測らんと欲すれば必ず之を明師に得。

——竹帛を舒べて古今を考うれば則ち天地は其の情を蔵す所無し。況んや鬼神をや、人事をや。（勗学篇）
載籍、明師に由つて無限の世界を窺見し、神秘の世界を探測し、書物をひもといて古今を考えれば、自然に天地の

情、鬼神の情、人事の情を会得できるとみているのは、読書万巻に及ぶ葛洪の自己体験から出た確信であろう。おなじく勗学篇のなかで、家の中に居て古典に心を遊ばせ、隠れた真理を探り、心静かに道を楽しみ、嚴寒の後にも青緑の色を変えぬ確乎不拔の操をもつ人間の存在を、葛洪ははげしく希求しているが、その希求は、そのような人間が現実には僅かしか存在しないことを嘆く深い絶望となってはいつている。

葛洪にとって嚴寒の後にも青緑の色を変えぬ確乎不拔の操を持する人間の存在が如何にして可能であるかを考えることは、永遠に色褪せることのない生命を獲得する神仙の存在が如何にして可能であるかを追求すること、変りはなかった。『抱朴子』の外篇に儒家的思想をとおして現実の相をとらえ、その内篇に道家的思想をとおして永遠の相をとらえる操作においていたずらに矛盾撞着しない思想家が葛洪である。

個内に内在する質が学問文化の触発と影響によって変容する可能性をみせぬかぎり、葛洪にとって質は単に内なる素材でしかなかった。『論語』が君子を評して「文質彬彬」と規定するとき、質と文とが均衡した比重をもち、質それ自体で独立した価値を保有していた。文と質についてのかかる認識は、葛洪にはない。質は学問文化の切磋を受け陶冶琢磨されて文ある美しさに変容し昇華しなければならぬのであって、質から文への連続性のなかに、質の存在が意識されていた。道を思想の質とするならば、それにはたいして深みのある叡智を学問によって、内面化された心の美を文化によって彫琢することができるとき、「文学」が人倫の首となり、大教の本となると、葛洪は考える。逆に云うならば、葛洪の質の觀念には、道家のように質がそのままの状態であることが、自然の道にかなない、自然的な美の様相であると認識する発想はなかった。つまり質が文に転化し変容する営為を作為としてしりぞける觀念はみられない。質と文を連続性の上でとらえ、質から文への昇華作用を重視する葛洪の文質觀は、そのまま彼の文芸思想と重なっていた。漢代の儒教的文芸觀は「文質彬彬」の君子の様態を認めながらも、こと文芸に關していえば、結局のところ文より質を重んじて、ついに道学的臭気から抜け出すことができなかった。それにくらべると、葛洪の文芸思想は漢代

の文芸観をはるかにつきぬけた地平に躍り出ている。しかも尚、作為をしりぞけて無作為の素朴さに逆説の美を発見した魏晋の老荘的な芸術観ないし文芸観をも止揚している。そこに葛洪の独自の文学認識があるが、それについては、次章にひきつづき、具体的な検証をこころみることにする。

四

『抱朴子』の尚博篇をみると、文章と徳行を対比させて論じている。所謂「文学」ではなく文章を徳行との比較の対象にあげているところに留意すべきである。

徳行は事有るがために、優劣見易し。文章は微妙なるが為に、其の理識り難し。夫れ見易き者は粗なり。識り難き者は精なり。夫れ唯粗なるや、故より銓衡定め有り。夫れ唯精なるや、故より品藻一め難し。吾故に見易きの粗を捨てて識り難きの精を論ず。亦た可ならずや。(尚博篇)

従来、徳行に対する伝統的な対比の観念は「文学」である。『論語』が徳行、政事、言語、文学の四科をたてて以来、六朝の『世説新語』も篇目をたてる際に、真先にこの四科をかがけている。云うまでもなく、その際の「文学」という用語は広義の學術學問を指していた。『論語』の「文学は子游・子夏」(先進篇)について、楊雄が『法言』吾子篇で「子游子夏は其の書を得」といい、刑昺の『論語義疏』が「文章博学は則ち子游子夏の二人有り」と注していることからみて、書籍學問に博く通じていて、文章にもすぐれているという意味が先秦以前の「文学」の概念であった。ところが葛洪が徳行の観念と対比して、ここにはつきりと文章の観念をすえていることは注目に値いする。葛洪は文学(學問)と文章(詞章詩賦)の概念を明確に使分けれることを意識した上で、徳行と対比するものに、「文学」ではなく文章をもちだしている。そこに、彼の創意と工夫がある。

然も問題はそこにとどまっていない。従来徳行、政事を第一義の道と考え、第一義の道に対して極度に敏感な

反応をみせ、多大の関心を注ぐのが、伝統的な中国士大夫の思想的姿勢であった。しかしながら、葛洪の場合は、その関心が徳行よりも、より多く文章に向けられている事実は、伝統的な中国士大夫の思想的姿勢に逆行するものであった。葛洪が、徳行には事実事跡の痕跡証拠があるので品評を定むるに容易であるが、文章は表現の様式をとおして微妙な発言があるために、その品評は容易に下しがたいとして、「見易き粗なる（徳行）を捨てて」「識り難き精なる（文章）を論ずる」ことを是とする態度を表明するのが、それである。この表明の意義は重い。今更ことわるまでもなく、このことで以って、葛洪が徳行を第二義的に考えていたとみるのはあたっていない。ここに於ける葛洪の視点は批評すべき対象としての徳行であり文章である。その限定のなかで、なお葛洪の批評的関心が、徳行よりも文章のほうに旺盛にはたらいっていることの事実が重要なのである。なぜならば、そのことは、文芸批評家としての資質の優秀性を葛洪に発見し得るかどうか、彼の文芸観に創造性があるかどうか、基本のところ密接にかかわりをもつ問題であるからである。

この問題をふかめるために、葛洪の文芸観をさらに掘り下げる必要がある。

文章の徳行に与^おけるや、猶十尺の一丈に与^おけるがごとし。之（文章）を餘事と謂うは、未だ之を前に聞かず。夫れ上天の以て象^{かたち}を垂るる所は、唐虞（古代の聖帝）の称^たえを為す所以なり。大人には虎の豹^{あや}あり、君子には豹の蔚^{あや}あり。昌^{あや}且（周の文王、周公旦）の聖を定むるや一字に諡^{おと}す。仲尼の周に従うの郁は文にあらざるなし。八卦生ずるは鷹隼の被むる所、六甲出ずるは靈龜の負う所。文の在る所は賤と雖も貴なり。犬羊の羶は未だ比するを得ず。夫れ本は必ずしも珍ならず。末は必ずしも悉くは薄ならず。（尚博篇）

この一節は、文章の価値が徳行の価値に勝るとも劣らないことを論じたものである。「夫れ本は必ずしも珍ならず、末は必ずしも悉くは薄ならず」とは、「文章の徳行に与^おけるや、猶十尺の一丈に与^おけるがごとし」の考えを更に一步押し進めて、文章の優位性にやや傾むく発言である。葛洪の文芸観はその意味でも、魏の曹丕が『典論』論文で「文

章は経国の大業にして、不朽の盛事なり」と述べて文学創造の価値が政治と徳行の事業に匹敵するものとみた文学価値説を踏まえ、それを発展させたものであった。それは、政治と道徳との癒着からぬけ出して、しだいに文芸が自立の道をもとめてゆく六朝時代の幕あけにふさわしい文学価値説の樹立であった。

五

葛洪の文学価値説が東晋期にふさわしい時代の思想であったように、そこから出発した彼の文芸批評に時代の思潮に逆流する反時代的な思想を発見することはむしろ困難である。その証拠に、彼の反尚古主義的文学史観をとりあげてみよう。現代の書がいかに有益であっても、前代の遺文にはかなわないとする頑迷な尚古主義は、中国思想史のなかに、それをささえてきた中国の士大夫のなかに、根強く存続してきた歴史観からきている。葛洪が生きた東晋時代もまたその例外ではありえなかった。

超群の人有りと雖も、猶之は竹帛の載する所に及ばずと謂う。益世の書有りと雖も、猶之は前代の遺文に及ばずと謂う。是を以て仲尼は当時に重んぜられず、太玄（楊雄の書）は比肩（劉向）に蚩薄せらる。俗士は多く、今の山は古の山の高きに及ばず、今の海は古の海の広きに及ばず、今の日は古の日の熱きに及ばず、今の月は古の月の朗まに及ばずと云う。何ぞ今の方士の、古の枯骨こつこに減おとらざることを肯許みとめんや。聞く所を重んじ、見る所を軽んずるは、一世のみの患う所に非ず。昔の琴を破り、絃を勦きくは諒まことに以有りて然るなり。（尚博篇）

ここで葛洪はあきらかに中国の尚古主義が民族の強い伝統的習性としてあることを認めている。しかもその尚古主義的習性のために嘗て孔子も楊雄も彼等が生きた当時において、不当に軽視され、嘲笑の対象とさえなってきたにもかかわらず、その事実には目をつぶる尚古主義の身勝手さに、葛洪ははげしい怒りをぶつけている。

東晋期の詩史観もこの尚古主義的習性に浸蝕されていたとみて、葛洪は具体的な作品例をあげながら、それに次の

よくな反論を加えている。

今の詩は古の詩と俱に義理有るも、之を士に方うれば、並に徳行有るとも、一人の偏ひとえに去文に長ずれば、一例と謂うべからず。之を女に比うれば、俱に国色を体すとも、一人の独り百伎に閑のびやかなれば、混じて異なる無しと為すべからず。若し俱に宮室を論ずれば、奚斯路寢（詩経）の頌は、王生の靈光を賦すると何如んと。若し同じ遊獵を説けば、叔敗盧鈴（詩経）の詩は、相如の上林を言う何如んと。並に祭祀を美するに、清廟雲漢（詩経）の辞は、郭氏の南郊の艶に何如んと。等に征伐を称たたうるに、出軍六月（詩経）の作は、陳琳の武軍の壮に何如んと。

近者、夏侯湛、潘安仁並に補亡詩を作る。白華由庚南陔華黍（詩経）の属なり。諸碩儒、高才の文を賞する者は、咸みな以えらく、古詩三百は未だ以て二賢に偶くふるに足ること有らずと。（鈞世篇）

此の一節について、頰を厭わず、作者と作品名を補足しながら解説するとすれば、宮殿を歌った詩に、詩経の魯の公子奚斯が歌った「閔宮」があるが、後漢の王延寿の「魯靈光殿賦」にはかなわないし、狩獵を歌った詩に、詩経の「大叔于田」「盧令」があるが、これも前漢の司馬相如の「上林賦」には及ばないし、祭祀を美よみした詩に、詩経の「清廟」「雲漢」があるが、東晋の郭璞の「南郊賦」の艶美さにはかなわないし、戦争を歌った詩に、詩経の「六月」があるが、魏の陳琳の「武軍賦」の勇壮さに及ばないと葛洪は論じている。

ここに葛洪が詩経の詩篇と比較してとりあげた詩賦家のなかに、東晋の郭璞の名が雜つてみえるのは、頗る興味ぶかい。郭璞は「遊仙詩」の詩人として、『山海経』の注釈者として、この時代に異彩を放つ文学者であるが、『搜神記』の撰者干寶と一緒に、東晋王朝の著作郎の職につき、国史編纂に従事している。この時郭璞は干寶に、干寶は郭璞に異才の香気をたがいにかぎわけ、親しい友情をわかちあっている。しかもなおこの時に葛洪が干寶によって、散騎常侍、大著作に推挙されたのである。現在葛洪と郭璞の昵懇な關係を直接知るこのできる資料は残っていないが、

干寶をとおして葛洪が郭璞の人柄と作品について関心を寄せ、それを熟知していたとみても不自然ではない。然も、葛洪、郭璞のいずれもが神仙養生の術に心を注いだ人であるだけに、葛洪の郭璞についての関心はなおさら深くあったと考えて差しつかえあるまい。

此の郭璞よりも、ややさか上る時代の西晋期にあって潘岳、夏侯湛の二人は当時に於ける一流の詩人であった。葛洪が、彼らの「補亡詩」を例にとりながら、詩経はその三百篇を束にしてかかっても、此の偉大な近代の二詩人に及ぶことはできないと発言するに至っては、彼の反尚古主義は、当時においてなお絶対的な權威の書であった經典の聖域を凌辱する結果となっている。

かかる徹底した反尚古主義の姿勢には、昔は万事が質素であったが、今日はすべて修飾があるように、文芸作品にもまた同じ現象があり、古の素朴な表現様式から出発して、華麗な修辭学で装身する様式を表現とするようになったのは、時が移り世が變るのであるから、至極当然の理だとみる認識が葛洪にある。この合理的な進化説が^⑤あって、文学の表現様式の發展的法則を是認し、徹底した反權威反尚古主義の文学史觀を提起することができたのである。

且つ夫れ、尚書は政事の集なり。然るに未だ近代の優文の詔策、軍書、奏議の清富瞻麗なるに若^{しか}ざるなり。毛詩は華彩の辭なり。然るに上林、羽獵、二京、三都の汪濊博富には及ばず。(鈞世篇)

毛詩が華かな色どりのある詩歌だといっても、司馬相如、揚雄、張衡、左思等の辭賦家の諸賦に溢れている美の深き広きには到底かなわない。このことは散文の領域にも通じる事態があり、古代の政事の事柄を誌した尚書の文章は、おなじく政事にかかわる近代の文藻豊かですっきりした美しい文章の比ではあるまいと葛洪は論じている。然しながら、それでもなお、何故尚古主義者が古代の書物文章を深遠とみるのか、その理由を考える葛洪の論理は明解で頗る合理的である。

古書の隠るること多きは、未だ必ずしも昔人の故^{もと}より曉^{さと}り難きを欲するにあらず。或は世異なりて語變る。或は

方言同じからず。荒を経て乱を歴て埋蔵すること久しく、簡編朽絶し亡失する者多し。或は章句脱去す。是を以て知り難きこと深きに至るが若くに似たり。

これは卒直に肯定すべき意見である。古代の書物及び文章がながい時間的経過のなかで、戦乱に遭い、亡失し欠落するうきめにあつたために、読み取りがゆきとどかなくなつたのを、逆に權威化するのが尚古主義だとみている。しかも葛洪は、古い文章でありさえすれば、やたらとありがたがり、新しい時代の文章であれば、たとえそれが金玉の質をもつていても、瓦礫同然とみなす人々を、「俗儒」とよんでばからなかつた。そこに彼の反尚古反權威の強靱な合理主義的態度が一貫してあることを認めることができるであろう。

六

反尚古主義の文学觀にたち、近代の文芸表現の樣態にくみする葛洪は、西晋から東晋にかけてのごく身近かな時期の文芸にたいして、具体的にどのような評價をあたえていたか、此の章で考えてみることにする。

余嘗て嵇君道に問いて曰く、左太冲、張茂先は通人と謂うべきか。君道答えて曰く。通人は聖人の次なり。其の間に容る所無しと。(意林)

ここでは、西晋期の詩賦家左思、張華が通人であるかどうかが問題にされている。此の通人説は、葛洪が漢代の思想書のなかでとりわけ珍重した王充の『論衡』超奇篇に、「書千篇以上、萬卷以下に通じ、雅言を弘暢し、文読を審査して以て教授し、人の師^た爲る者は通人なり」という説から出ている。左思の「三都賦」、張華の「博物志」をあげるまでもなく、此の二人の文学者が博学深識の君子とみなされていたのは、当時の定評であつた。通人が聖人に次ぐ存在があるとすれば、葛洪は左思、張華の文学作品に極めて高い評價をあたえていたとみてよい。葛洪が左思の「三都賦」を反尚古主義の例証としてあげていることを考えても、彼が左思の文学に、成熟した文学的達成を認めていた

ことはあきらかである。左思、張華が活躍した西晋の文学は太康期の文学と云われているが、そのなかの中核的文人はなんといっても陸機である。葛洪は陸機とその弟陸雲の文学をどのようにみていたであろうか。

嵇君道曰く。二陸の文を読む毎に、未だ嘗て書を廃せざるにあらざりて歎じ、其の巻の尽くるを恐る。陸子の十篇は誠に快書なり。其の辞の富めるは覃思をもつて損うべからず。其の理の約なるは鴻筆をもつて益すべからず。此の二人を觀るに、豈に徒の儒雅の士のみならんや。文意の人なり。（北堂書鈔一百引抱朴子逸文）

嵇君道は二陸の優劣を問う。抱朴子曰く。二陸の文の百許の巻を見るに、未だ尽きざるが似し。淮南嘗て言う。

二陸は規を重んじ矩を吝むこと多少も無し。一手の中に利鈍無きにあらず。之を他人に方ぶれば、江漢の潢汗に与るが若し。其の精処に及べば、漢魏の人に妙絶すと。（太平御覽六百二引抱朴子逸文）

この二つの資料はいずれも陸機陸雲兄弟の文学を論評せるもので、嵇君道、葛洪が二陸の書に魅せられていた事実の告白からはじまっている。嵇君道が二陸の文章について、論理が簡約で辞采が豊富であるところから、二陸はなみの儒雅の士ではなく、自分の文章を意識的に創造しようとした「文意の人」と規定しているのは興味深い。葛洪もその意見に組みしたのである。彼は二陸兄弟の優劣など論ずる興味はさらさらなかったとみえて、只陸機陸雲兄弟の文芸ですぐれたものは、漢魏の文人に絶えてない妙味があると絶讃している淮南の説にくみしている。

葛洪の家が三国呉の名家の出身で、その祖父は吏部尚書、太子少傅、侍中を歴任し、父も会稽太守を拝していたが、呉の滅亡とどうじに晋朝に出仕した事情は、陸機兄弟が歴代呉の第一級の門閥を誇る貴族の出自であったが、やはり晋の三国統一後は故国を去って洛陽に向き、晋朝に仕えるようになったのと頗る類似している。『世説新語』をみると、陸機兄弟のような呉出身の士が洛陽に入った時、北方人士から嘲笑の対象にされ、亡国の悲哀をつくづくと味わったことをしらせている。侯外虚等の編著『中国思想通史』第二巻の第十七章「葛洪内神仙外儒術的道教思想」のなかで、具体的に『抱朴子』の審拳、疾謬、譏惑の各篇の中から、江東の豪族が亡国後に中原豪族の欺侮と嘲弄を受け

て悲哀の声をあげている資料をとり出し、併せて葛洪の幼年及び青年期の生活もそのような環境のなかですごされてきたと、述べている。陸機陸雲が或いは葛洪の父が、直接的に亡国の悲哀をなめ、北方人士の嘲弄のなかで呉出身の劣等觀を味わったのにくらべ、葛洪のそれは一世代をおいているために、それほど直接的な体験としてなかったであろう。それでもなお葛洪は陸機兄弟の置かれた洛陽に於ける心理状態を充分に汲みとれる立場にあったはずである。葛洪が陸機、陸雲兄弟の文学を併せて絶賛するのは案外そのような深層心理に原因しているものがあるのかもしれない。然しながら葛洪が陸機兄弟の文学を高く評価したのはそれだけの理由からではない。魏晉六朝期のなかで、最もはなやかな勁俊の美を放ったのは西晉太康期の文学である。太康以後の文学はこの勁俊の美を失い、いたずらに麗美にのみながれている。かかる太康文学の旗手であった陸機、陸雲、左思、張華、潘岳、夏侯湛のいずれにも、葛洪は高い評価を与えている。豊麗な修辭を表現に駆使してなお骨氣を失わない此の期の文学に、共通してある美意識が葛洪のなかにあったとみたい。

今あらためて、葛洪が賞讃した歴代の詩賦家をあげてみると、漢代では司馬相如、楊雄、張衡、曹魏では陳琳、西晉では左思、張華、陸機、陸雲、潘岳、夏侯湛、東晉の同時代人では郭璞である。この葛洪の文学的評價の視野から、曹魏の詩賦家が陳琳を除いて殆どがぬけおちているのは奇妙である。曹魏の詩人、例えば曹植、王粲、阮籍、嵇康等の文芸は、辭賦に小篇が多く、それだけに現実主義の氣味の強い、氣骨雄健な作風を特徴としている。葛洪が好んだのは、氣骨が勁俊であるばかりでなく、辭采の奇抜、豊美さに於て異彩をはなち、構想力の偉容を誇る詩賦作家群である。合理主義者葛洪はやはり江南出身らしく、文芸の風味に浪漫主義の香りあることを喜び、豊麗な美の造型に魅せられていたのであろう。

七

豊麗な修辭は文章表現の重要な要素の一つであるが、そもそも文章修辭学に関して、葛洪はどのような原理的認識

をもっていたのであろうか。

羲和は光を昇らせて以て旦を啓き、望舒は景を曜かせて以て夜を灼す。立材は並に生じて用を異にす。百葉は秀を雜えて治を殊にす。四時は会して歳功成る。五色は聚まりて綿繡人を麗しくす。音階いて簫美わし。群言合して道芸弁んず。(喻蔽篇)

ここで、比喩的に累積されてゆく論理のねらいは、修辞の重要性を説得することにある。どのような思想も、芸の領域で生きいきと表現される必要性を、葛洪は確認しておきたいのであろうか。たしかに、いろいろの響きと色彩をもつ言語群がその正しい位置づけを求めながら整合と組成を繰返すなかでしか、正しい思想の伝達は不可能であるとする認識が葛洪にある。これは修辞表現に時代性を認めようとする姿勢、質が文に変容してはじめて質の本質をみきわめる姿勢と絡んでくる葛洪独自の認識である。

したがって、葛洪にとって表現修辞学は重要不可欠の伝達要素であるが、窮極には思想の芸である。思想の芸が過剰にながれ、煩雑になると、思想の骨格が破壊される危険がある。葛洪はその危険性について、次の様に警告している。

抱朴子曰く。属筆の家亦た各々に疾有り。其の深きは則ち譬煩にして言冗、申ねて誠め広く喩うるは、棄てんと欲して惜み、覚えず煩を成すを思ふ。繁華の擘擘は、則ち七曜を並べて以て高く麗り、沈微の論妙は則ち玄澗の測る無きに儕し。人事細として浹かざる無し。王道微として備わらざる無し。故に賤しくして言貴く、千載に弥よ彰かなり。(辞義篇)

修辞の過剰の一つに譬喩の煩雑さがあるが、内容証拠の不足から、思想の芸のみが積み重ねられてゆくのは、表面的につややかで美しくとも、そこに骨格の脆弱性は蔽うべくもなく露呈されていると、葛洪はみている。

葛洪にとって、修辞が思想の芸でありながら、美の本質にかなう様態を示すのは、細やかな人情と政治の理想のす

べてを備えて、奥ふかく華やかに輝くときであつた。

『春秋左伝』襄公二十五年の条りに、「言わざれば、誰か其の志を知らん。言に文無ければ、行きて遠からず」という孔子の発言が記されている。孔子の所謂原始儒教が単に尚道のみならず、尚美の文芸思想をもっていたことを知らせる資料の一つである。これをあきらかに意識し踏まえた発言が葛洪にある。

抱朴子曰く。筌は以て棄つべし。而るに魚未だ獲られざれば、則ち筌無きを得ず。文は以て廢すべし。道の未だ行われざれば、文無きを得ず。(尚博篇)

志が遠くに行われるためにふさわしい文—言語の美が附与されていなければならぬとする孔子の意見とどうように、ここで葛洪は逆説的表現を用いながら、修辭美が思想(道)の芸でありながらそれが道の伝達に不可欠の要素であることを重視し、強調しているのである。

繰返すようではあるが、葛洪が文芸の修辭を重視し、修辭美に乏しい古代の文学をよしとする尚古主義に痛烈な批判を加え、近き時代の文学の旗手、陸機、潘岳、郭璞を高く評価している点で、彼も又時代の批評家であつた。にもかかわらず、その彼が、「詩賦浅近の細文を貴愛し、深美富博の子書を忽薄にす」ることを慨嘆しているのは矛盾であらうか。

或は詩賦浅近の細文を貴愛し、深美富博の子書を忽薄にす。磋切の至言を以て駸拙と爲し。虚華の小弁を以て妍巧と爲す。真偽転倒し、玉石混淆す。廣樂を桑間と同じうし、龍章を華服と鈞しうす。悠々として皆然り。歎ずべく慨すべき者なり。(尚博篇)

この葛洪の発言をとらえて、葛洪が文学の存在価値を否認するものだと考えるのはあつていない。詩賦を愛好するあまりに、思想の宝庫であり、人間の眞実を教える切磋の至言が存在する子書を放棄して、顧みない愚を憤つていたのである。云い換えるならば、詩賦の華美のみを追い求める俗流がその目に野暮とうつしたもののなかに、ある種

の真実の確かさがあるとみて、その俗流が「真偽転倒し、玉石混淆し」ている現状を慨嘆しているのである。実のところ、流俗にはしる者は、ほんものの音楽である「廣樂」の価値がわからず、それを俗曲の「桑間」と同一視してしまふし、ほんとうに美しい織物である「龍章」の価値がわからず、それと時俗の好みにあった「華服」とのみわけがつかなくなっている思想と文学の情況が、葛洪をとりまく東晋期の現状であった。葛洪はこの現状に対してがまんがならず、「詩賦の細文を貴愛し、深美富博の子書を忽薄にす」という痛烈な批判を浴びせたのである。

葛洪は『抱朴子』辞義篇においても、東晋時代の詩には、為政者の過失があればそれを諷刺して世の中に裨益することの多かつた古詩の精神がうしなわれており、ただ表むきのみせかけばかりの小細工に終っている事実を指摘し、それを次のように批判している。

文は豊贍を貴ぶ。何ぞ必ずしも善を称えて一口の如くならんや。風俗の流れを掻い、世塗の凌夷を遷れ、疑者の路を通わせ、貧者の乏しきを賑わすこと能わずんば、何ぞ春華が肴糧の用を為さず、莖蕙が冰寒の急を救わざるに異ならんや。古詩は過失を刺す。故に益有りて貴し。今の詩は純ら虚誉なり。故に損有りて賤し。(辞義篇)

此の一節の冒頭にも発言されている「文は豊贍を貴ぶ」という葛洪の文学信条は、今の詩、つまり東晋期の詩風批判をおこなう場合も変っていない。その上に立って風俗政治の頹廢があれば、それを救い、疑う者があれば、それをとぎ、貧しきものあれば、それを富ますような現実への参加が、文学に必要であると葛洪はいう。これは儒教の文学観であるが、東晋時代の詩が現実参加、政治批判の傾向から著しく後退し、山水景物に沈湎して、社会と人間に背をむけていた文学情況に即しての批評であった。

八

葛洪の文学観がどちらかといえば、そのおおむねは儒家の側に立つものではあるが、単純にそうとばかりきめてしま

うことは危険である。葛洪の思想は儒家の文学観固有の尚古主義を嫌い、文質の調和を説くものの、窮極のところは質の重視に傾斜して、文の否定に向う儒教的文学観に内在する頑迷なりゴリズムから解放されていた。

しかし、こと自己の生き方に対する規制となると、葛洪の発言は峻厳を極めていて、儒家のリゴリズムが支配的である。

夫れ制器は周急を珍として、外形を采飾するを以て善と為さず。立言は教を助くるを貴び、俗に偶し譽を集むるを以て高しと為さず。徒だ阿順諂諛、虚美隱惡の若きは、豈に失を匡し、違を弼け、過を補う所ならんや。和すること寡なきを慮かつて白雪の音を廢し、售ること難きを嫌いて、連城の価を賤しむは、余は焉を取る無し。華艶を厲りて悦を取ること能わざるに非ず、抗言の吝多きを知らざるに非ず。然るに情に違ひ筆を曲げて、真偽を錯乱するに忍びざるなり。心と口相契い、顧みて景に愧じざらしめんと欲す。知音の後に在るを冀うなり。否泰に命有り、通塞は天に聽す。何ぞ必ずしも書の行われ言の用いられて、榮の当年に及ばんや。(広喩篇)

否泰通塞―世に容れられるか否かは天命にまかせるといふのは儒教である。真情を貫ぬいて自分の影に愧じない生き方が現実には不遇であっても、知己を後世に待つと考えるのは、これまた儒教からきている。養生長生の術が克己の厳しい鍛練を課するのは自己の内面に渦巻くさまざまな欲望にたいしてである。葛洪の発言には義の觀念が内在していて、真情を曲げない剛直と高貴を愛する精神がある。それは儒教の精神である。葛洪が所謂後世「曠達派の後継」と呼ばれる清談の徒山簡・阮瞻・王澄・謝混・胡母輔之・阮放・畢卓等にたいして、頗る手厳しい批判を加えてゆめることがなかったのは、彼がかかると儒家流の自己規制をみずからの思想の骨格にすえていたからであろう。

抱朴子曰く。戴叔鸞、阮嗣宗は俗に傲りて自ら放つ。見て大度と謂う。其の材力を量らず、傲生の匹に非ずして、慕いて之を学ぶ。項を乱し頭に科し、或は裸袒蹲夷し、或は脚を稠衆に濯い、或は便を人の前に洩す、或は客を停めて独り食す、或は酒を注いで廻りて親しむ所には止む。――蓋し左衽の為す所にして、諸夏の快事に非ず。

今世人は戴・阮の自然無くして、其の倨慢に効^なう。亦た是れ醜女の自ら量るに闇きの類いなり。(刺驕篇)

この篇にあって、葛洪が否定の対象としたのは、後漢の逸民戴良でもなければ魏末の竹林の七賢の領袖阮籍でもない。彼等の思想と行動の軌跡にはまだ自然の本質にかなうものがあつたが、彼等の才能識見にはるかに及ばない西晋期の亜流の徒が、その倨慢の風にならない、放誕と奇驕な行為にはしるのを痛罵しているのである。侯外慮の『中国思想通史』はこの葛洪の漢末魏晋の学風に対する批判は、ただ零碎な行為の上からのみの批判であつて、実体にせまつていない皮相な見解だとみている。^⑤然しながら、東晋王朝創建当初にあって、西晋亡国の要因が「竹林の七賢」等の清談者流の放肆な思想と行動にあるという見方が支配していた事実がある。葛洪の友人で国史編纂官の職にあつた干寶が『晋紀』総論で、それになりたいするきわめて明確な記述を残しているのがそれである。^⑥『抱朴子』の「刺驕」「彈衡」の二篇も、この東晋当初の思想史のなかで、洗い出すならば、その時の歴史的現実とかかわる緊要な思想上の問題提起とみることができよう。この清談曠達派の亜流批判が、葛洪がもっとも敬愛してやまなかつた文学者陸機の文学評価とかかわっている興味ぶかい資料がいま一つある。

秦の時、無鼻の酸を覚え、陽翟は無癭の人を憎む。陸君は深く文士の放蕩、流遁、遂往を疾^{いた}みて、虚誕の言を為さず。能はざるに非ざるなり。陸君の文は猶玄圃の積玉のごとし、夜光るに非ざる無し。(北堂書鈔一百抱朴

子逸文)

陸機の文を「玄圃の積玉」のごとしと、その妖しい美しさを賞賛するまえに、彼が魏晋の文士の放蕩、流遁、遂往を疾み、虚誕の言を吐かなかつたのは、それができなかつたのでなく、やらなかつたのだとみるところに、葛洪の思想がある。

たしかに、葛洪の文芸思想の骨格には、儒家流の自己規制をくずさない峻厳な批判精神がある。そしてまた、文辞の豊麗な修辭が時代の文学的所産であるとみる進化論的認識があつて、時代に逆行してはばからぬ煩迷は尚古主義

の文学的認識と徹底的に妥協を許さない柔軟な思想がある。此の復眼の思想が、葛洪の重層的な文芸観を構成している。六朝期の文学が華靡に流れる端緒をつくしたのは、まさに葛洪が当面していた東晋期の山水景物に沈湎して現実をかえりみず、表現の小細工のみにとらわれた脆弱な文風にあった。葛洪の文芸批評はいちはやくこの危険性に気づき、それを見据えて苛惜なき批判を加えている。

夫れ文章の体は詳賞し難し。苟に耳に入るを以て佳となし、心に適うを快と為さば、忘味の九成、雅頌の風流を知るもの尠なし。所謂塩梅の鹹酸を考えれば、大羹の致さざるを知らず。飄飄の細巧に明らかなるも、沈深の弘邃に蔽きなり。(辞義篇)

誤解をおそれずに云えば葛洪の文芸思想の発端から終末に至るまでのすべてがここに還元され収斂しているといえる。彼は小細工の巧みにこだわらず、どっしりし奥ゆきのある文芸作品を希求してやまない。しかも彼の文芸思想の根底には、塩加減の淡白な吸物が最上の吸物であるように、淡白な趣きをもつ文章をもつて最高とする美意識が内在していたのである。此の一節の批評文がかかえる文芸批評史的意義は重要である。なぜならば、此の塩梅の「鹹酸」をもってやがて晩唐期の司空図が詩論を展開しており、さらにはまた、宋代の文芸批評になると、「大羹の致さざる」が如き「淡白」の風韻に詩の最高の美学があるとみて、それまであまり顧みられなかった陶淵明の詩風を高く評価するようになるからである。(一九七六、一一、六)

註①佐中杜氏の「葛洪の生涯とその風格」は「東方学論集」に所収されるもので葛洪の伝記を取り扱った好論文である。

②『抱朴子』の読解にあたって、御手洗勝氏の『抱朴子簡注』（広島大学哲学研究室刊）の詳細な校注はとりわけ有益であった。併せて本田濟氏訳『抱朴子』（古典文学大系八巻・平凡社刊）をも参考にしたが、訳文としてのこなれがよく教えられることが多くあった。

③先秦及び漢代の「文学」及び「文章」と「文」の概念語を考察の対象とした論文に郭紹虞氏の『中国文学批評史』がある。

④『抱朴子』行品篇の「擒貌藻以立言、辭炳蔚而清允者、文人也」「甄墳索之淵奧、該前言以窮理者、儒人也」を参照。

⑤郭璞と干寶との交友關係資料は『世說新語』文學篇注引郭璞別伝に「時有醉醜之失、友人干令升（寶）戒之曰、此伐性之斧也。璞曰吾所受有分、恒恐用之不尽、豈酒色能害」をあり、この干寶の郭璞にたいする忠告は二人が東晋朝の著作郎の職についていた時のものである。拙稿「郭璞に於ける詩人の運命」（九州中国学会報第七卷）にこの資料をとりあげて郭璞を論じている。

⑥『抱朴子』省煩篇の最後の条りを参照。

⑦「曠達の後継」という呼称は青木正兒氏の『中国文学思想史』の「清談」四の西晋の清談の項による。

⑧侯外廬等編『中国思想通史』はその第二卷第一七章の「葛洪内神仙外儒術の道教思想」において「葛洪対漢末魏晋学風の批判、實沒有什麼高明的見解、只是零碎的従行為上來説說、至多根漢代『王朔道雜之』的内法外儒的理論在表面上駁詰一番而已、並未能搔着痒處」と論じている。

⑨干寶は晋紀総論（文選所収）において、東晋亡国の要因について「風俗淫僻にして恥尚所を失い、学者は壯老を以て宗と爲して六経を黜け、談者は虚薄を以て辯と爲し、名檢を賤み、身を行う者は放濁を以て通となし、節信を狭しと爲す云々」と論じ、併せて清談曠達派の頭領阮籍について「阮籍の行を觀て、礼教崩弛の由る所を覺る」と評している。